

温故知新篇

柔道もまた人なり

元柔道部長 故橋 本 孝

本塾体育会に於いて最も輝かしい伝統と永い歴史を有する柔道部が、戦後占領政策のため一時バアジの憂き日を見たが、やがて解除されるや、柔道そのものが新たな角度から再認識され、道場の整備につれ入部希望者も日を追うて増加の一途を辿り、昨今では戦前に勝るとも劣らぬ隆盛を来たすに至った。事実柔道が、大学に於ける正課体育の一つとして実施されてからは、部の活動と相俟つてなかなか活発となり、日吉の道場の如きは狹隘を告げ、使用上可成りの工夫をする有様となつて來た。

勿論かような数量的増大は、柔道が盛んになつて來た一つの証拠としてまことに喜ばしいことに違ひないが、しかしあれわれ柔道部関係者は必ずしもかような外見的隆昌に安住する訳にゆかぬ。名実とも充実した部となし、輝かしい伝統に恥ぢないようにするためには、部員諸君は一人残らず塾風を体得し、塾生たるの本分に徹して、それぞれ柔道に精進努力することが何より肝要であろう。

日頃ある知人が來訪され、いろいろの話の末、柔道の話になり、各種選手権試合から早慶対校試合にまで及び具体的実例を挙げ、犀利な批評と警抜な観察眼をひからせ乍ら、微に入り細をうがつて説き来たり説き去り、何時果てるとも知らぬ有様であったが、その中私に一番印象が深かったことは次のような話であった。

「自分はこれまで各種の柔道試合を随分沢山見て來たが、その中でも全日本学生選手権試合や目ぼしい対校試合に

は万障繰り合せて見に行くようにしている。というのは、これわと思うような有望な選手が見付かれば、万難を排して自分の関係している会社へ入れることにしている。自分のこれまでの経験によれば、柔道の試合のような一瞬として油断の出来ない緊張した場面に於ける一挙手一投足は、よくその人の長所も短所も赤裸々に露呈するものである。相手のスキを見付ければ、一瞬、隼の如く行動を起こす明敏伶利なる頭脳の働き。幾度逆境に際会するもこれをはね返えさずには置かない堅忍不拔の精神、しかも事にのぞんで剛毅果断、卑怯未練の影だらない胸のすぐような試合態度、かような選手を見付けたときの自分の喜び。……これまで何人か会社へ入れたが、かかる青年こそ将来会社の幹部として会社を充分背負って立つことが出来ると自分は楽しみにしている。柔道は決して片々たる手先の技ではない。どうしても全身全靈の滲み出た技と云わなければなるまいと思う」

以上のような話を聞きながら私は「文は人なり」という言葉を思い起して「柔道もまた人なり」の感をつくづく深めざるを得なかったことを告白しておく。(三十一年七月十一日記)

柔道部長の思い出

元柔道部長 氣賀健三

わたしは柔道部の部長として有能ではなかつたし、功績もあつたとは思つておりませんので、部長時代の思い出を書くように依頼されましても恥づかしい気が先に立ちます。むしろ柔道部長をしていた時期に三田柔友会の方々の親切を深く身に感じ、先輩が後輩のために苦労を惜しまぬ心にうたれ、そして後輩の学生たちが先輩にたいして誠実な

態度で接していたこと、その上、個人々々としては先輩・後輩をとわず、みなさつぱりとした気象で、はきはきした、いかにもスポーツに鍛練された人間らしい態度に感心しておりました。部長として与えるところよりも、得るところの方がはるかに多かったと感じています。部長としての仕事といえば、早慶戦に臨席して挨拶の辞を述べること、年一回の卒業生送別会に出席すること、三田柔友会の会合に出席することが、きまつた仕事でありましたが、ほんとに、部の問題でこまつたことなどはひとつもなかつたと申してよいと思います。柔道部はさすがに塾の伝統を受けつぐこと最も古く、由緒のある部としての誇りに値するだけの精神の立派さを備えていると思ってよろこんでおりました。残念であったことを附け加えるならば、わたくしの在任中を通じて、早慶戦の優勝祝賀会を開くことができなかつたことです。OBも現役も、それはいざれも同じおもいだつたと思ひます。部長として何ひとつその点で力をかすことのできなかつたのは、申訳けありませんでした。

特別に楽しかった思い出といえば、何年でしたか、部員諸君と台湾旅行をしたことです。OBの尽力で台湾の大学や市の柔道団体と親善試合を重ねながら、台北から高雄まで、いくつかの都会で試合をしながら、名所、史蹟などを見物して廻る旅行でした。選手の腕前は日本の方が強いので、どの試合でも気楽でした。迎えてくれる台湾側のひとたちは礼儀正しく、鄭重で、こちらも迎えられるにふさわしい礼儀と鄭重さをとるよう心掛けました。学生諸君もよくそれを心得てくれたので、まさに文字通り親善の実をあげることができたと思つております。自由時間のときの行動については、わたくしはやかましいことをいわない主義で、各人の常識にまかせることにしていましたが、何の不都合も事件もおきなかつたと思つております。

高雄には古い塾出身の有力者で陳啓川さんという方がおられ、台北には黄さん蔡さんというやはり古い塾員がおられまして、われわれを招待して歓迎の宴を開いてくれました。台湾出身の塾員は、愛塾の念が強く、大いに感激しました。

ものです。こういう宴席でも学生諸君が礼儀正しく、態度を乱すようなことが起らなかつたのは、さすがに塾の体育会柔道部の伝統がものをいっているという感じを強くしました。土地の人たちもそれを高く評価していたように思います。

こういう精神を養つてくれる体育会柔道部に学び、柔道部を卒業するということは、試合に勝つとか業に熟達するとかいうことと同じように、時にはそれ以上にも大切なことだと信じます。

隨想

師範清水正一

開発の遅れていた世田谷深沢のあたりは、大根畑や芋畑の中を、新しい道が縦横に造られていた。

霜解けで泥んこの道を三人の学生が、日体学生寮の私の倉監室を訪ねて呉れたのは、そうした烈しい霜解けの続く二月初旬の午後だった。今から数えて約四十年前である。

当時の幹事古屋、熊谷、近藤の三君の靴は、周囲にヘバリ付いた赤土で三倍位の重さに見えたが、紐のまわり丈けはピカピカ磨き上げられた光が、今に眼の底に残っている。

三人は一応下交渉の使として、私に柔道部の指導に来て欲しい意向を語つてくれた。全く思いがけないこの事が、その後の私の人生を決定する事になった。

四十年間の慶應義塾柔道部の中に在つて、多くの部員や先輩の温い、そして力強い心の支えを得ていた私自身も、

今日迄こうして培かわれ、育てられて来ている事をしみじみ思う。

私は、塾生に教える何物もなかつた。それは、柔道とは“教えるものではなく、教わるものでもない。自からが創り出してゆくものであり、自からが発見してゆくものである”と、考えていたからである。

只、指導者の責務が有するとするならば、夫れは只管に柔道に打ち込み、一本一本の稽古を大切にする心構えを、稽古を通して示すことであり、理論や解説は求められたら与えればよい。あく迄も稽古の中に、稽古を通して自得する技と心を、後ろ姿で示してゆく事が柔道指導者の心の姿勢であるべきだ、とする若い時からの心掛けで歩いて来た。

そして、日日、歳々、肌を触れ合い、心を通わせて過した多くの若い仲間達の、その恵まれた環境の中では、その家庭の中でも、学校でも触れられない男の意氣を、潔癖性を、そして出すべきときの瞬間の勇気と決断とを人間対人間の闘争の場では、如何に大事であるかを自得する勘と、心のアヤを巧みに握る辛コスイばかりのズルサをも、共に体得する事によつて、雑草の逞しさが生れ、誇り高い心の昂揚に連るものである事を強度に要求し続けて來た。

それは、幾度かの早慶対抗戦の中に見た塾生のこうした内面的なものえの物足りなさから、之を強調し続けて來た部生活であつたと云えよう。そして、ようやく昭和三十年前後、少年時代からそつしたものを受け入れてくれた部員達によつて、早慶戦に輝く戦績を残して呉れた人達を忘れる事は出来ないし、心からのいとほしさを覚えている。

さて、想い出の幾つかを拾つてみよう。

初めて日吉の道場に出た時、昭和十三年四月、予科部員の合宿中であった。半ズボンの美少年がヒゲ面の大男赤塚君達の仲間で喜々として巧い稽古をしていた。中学生も一緒かなと思つていたが、後で少年、猪原君は既に予科生だ

と聞かされた。彼は大分奥手だったのだろう。

慶應予科の選手として前年秋の東京学連大会に、断然光った釣込腰、背負投の名手がいた。一寸太り氣味乍ら丸刈りのズングリした選手が、実に柔かな体捌きで小気味よく勝ち進んでゆく。誠に立派な素質を見た。

こんな選手とうんと稽古して見たいものだと思い乍ら審判していた記憶があった。

この合宿からそれが果せる楽しみを期待していた。ところが、道場でいくら探してもその顔が見当らない。どうしたんだろう、確かに慶應の学生の筈だったのにと思い乍ら合宿も過ぎた。五月の終りだったか、六月になつてからか、三田の道場で期待していた彼に会つた。日本代表使節としてイタリー、ドイツに派遣されていた、夫のが羽鳥君であった。

顔をいつも北極星を仰ぐ角度で外を歩く山崎君は、顔より先にノドボトケが日焼けすると、皆にカラカワれていった。

その彼の稽古振りは實に見事であった。悠然と自然本体に構え、両手の握りは必ず相手の両脇深くとる。右かと思うと左。左右何れもその一閃の大外刈りは瞬時の素速さで、而もガツと来るその刈りは強烈そのものであつた。軽い足捌きとサッと変る体捌きは如何なる攻撃も軽くかわして、全く柳に風と受け流す。

予科一年のこの名手には、自分が稽古をつけて貰つて居る様な錯覚を幾度びか味わされた。

藤川、始良、赤塚、飛田の四、五段の豪の者と稽古するより余程の苦心が要つた。

同じその頃、潮風香る横浜港の第一桟橋は熟闘の見送りの人達で一杯になつてゐた。慈々アメリカ遠征に旅立つ飯塚師範引卒の選手団は、デッキから元気な笑顔を揃えて見送りの人達に応えていた。

私は、教育召集で富士山麗滝ヶ原の廠営生活中であつた。抜け出して見送りに來た。当然軍服の儘で、軍力を下げ

た陸軍少尉の姿が部員や関係者に奇異の感を与えたのだろう。兵隊になつて仕舞つたのかと交る交る問われて閉口した事を覚えている。

又この年から予科生が寝技の力をつけようと当時寝技中心の高専大会に出場した。立技の素晴らしさは全日本学生のトップをゆく力を持っていたが、それ丈にたやすく寝技に入り切れないものがあつた。併し伝統の立技を、寝技オシリードに変える苦痛をいやと云う程度はされた。貴重な部生活を経験した人達の勇気を、尊いものと思う。

第一回の早慶戦（昭和十五年）、私が塾に就任した三年目の秋であった。五段六名を容する陣客は豪華そのものであつた。誰が見ても勝利を疑うものもない布陣で臨んだ。それが敗れた。

この時の試合は、恐らく関係者の誰もが柔道を思うとき、若き日を思うとき、胸の痛む無惨さに打ちふるえるであろう。

礼をするや全く組もうとせす逃げ廻り、場外の見物人の中に逃げ込んで仕舞う。之を場内に引張り入れるや、直ぐに相手は寝技に引込み寝てしまう。全く試合にはならない。流石温厚な飛田君（五段）も、余りの事に、指導も制御もしない審判橋本正次郎氏に喰つてかかり、試合を中断する場面さえあつた。今日では考えられない事であるが、当時でもこうした試合は他に見られないものであつた。

戦績は優勝と記録されていても、当時の早稲田の人達にも恐らくこの時の試合は、心の奥に思い深く焼き付いている事であろう。

私は初めて早慶戦の実体を見た。何故こんな試合をしなければならないのか、この対抗戦の何処に天下の名門校の権威があるのだろうかと疑つた。併し、両大学が、夫々二十五人の選手を一丸として、一人の人格となつて闘う対抗戦に、恥も、見栄も、誇りもかなぐり捨てて、何が何でも負けられないと逃げ廻つた選手に未熟はあつたとする事である。

ても、到底まともに行つて敵はぬ強者に、素直に敗れる無責任を潔よしとしない意地は認める。併しその手段に耐え難いものがあった。平常私は、勝負は綺麗事ではない。ギリギリの場で聞い抜く立派さも尊い。試合は人に見せるものでもなく、人に見て貰うものでもない。自分自身が闘うものである、と心掛けて来た。この試合をこの様にした総ての責任は、時の審判にある。当時柔道界の権威と目されていた審判に当つた一人の九段は、試合展開を成り行きに任せ、ルール無視にも何等の指導も制肘も出来ず、殆んど傍観的態度であった。私はこの先輩達の無気力さの中に柔道に於ける後進への愛情もなく、潔癖性もない自ら柔道の権威を失速させている両大家の姿に、何んとも云えぬやり切れなさと、圧え難い憤りを感じ乍ら注視していた。それは昨日の事の様であり、思い起こす度にこの胸を焼く。

この対抗戦は併し、柔道界に大きな波紋を投じた。翌年講道館審判規定の改変をもたらしたのである。即ち「引込み」は一切禁止された早慶戦が結果して、講道館規定の変革を見る程の権威が有り、アノ試合が原因してそうなったと手放しで誇り得るものでない事を私は思つた。

戦後の柔道部は、三田柔友会の先輩の肝入りで、道場こそ移り歩き乍らも伝統の火は絶える事なく燃え続けていた。学生柔道復活と同時に、部員、指導者、施設の整備の中に、稽古の開始された学校は全国のトップであった。

塾当局の柔道によせる理解と関心の深さと、之に対処して下さった先輩団の温かい支援は、誠に尊いものであつた。

朝飛君は、部員の中に溶け込んで、常にその誠実さで周囲を温かく包んで呉れた得難い指導者であった、彼の協力がどんなにか私を力付けてくれていたか計り知れない、ようやくその持ち味をフルに生かして呉れる日になつて、彼は去つた。塾柔道部にとつて惜しみても余りある人を失つた寂しさは深い。

あの顔、この顔、あの時、あの試合・遠征に合宿に・思い出は尽きない。私の過した塾柔道部の生活は、私の心の

中に生き続けるであろう。恐らく部員の心中にも。

擱筆に当つて提言したい。

戦後柔道はスポーツとなつた。この三十年間、世界的規模に発展して愛好されて來た盛況に眩惑された日本柔道界は、手放しで之を放置して來た。今、柔道の本質を論じても「時既に遅し」の感さえある。併し、本来柔道修行の過程の中に、勝負の比重は常に最も重んぜられ、勝負を目差して努力する平常の稽古の成果は大きく光つていた。

スポーツ柔道がこの勝負を追求し乍ら、日本柔道と異質に近い進展を見ている事は何故であろう。

それを單的に表現すれば、今日の柔道人が通常語として使用している「柔道の練習に行く」「今日は練習は休みだ」と云う、この言葉の中にスポーツ柔道が在る。

試合に勝つ為に練習があり、試合に備えて練習する。

だが、本来柔道には練習は無い。只、只一途の稽古が有る。投げられて投げて、投げられる。自からの五体を惜しみなく使い、満身の汗の中に没入して工夫する試行錯誤の果てに自得する技術を以て、勝負を試みる。試合の位置付けは此処であった。

柔道を志す者が、必ず踏むべきこの稽古の場を通らずに、理解も体得も少ない真似事の技術をもつて、単に勝敗のみを目差して來た現代世界柔道が、眞の稽古を踏んで学んだ柔道人に不評であるのは当然である。

その「稽古」こそ宝であつた柔道の修行を、自ら崩した日本柔道の行く道は、世界中から常にオビヤカされ通しで、やがて、「力こそ技」なりの力技になり果てる運命の近い事を思う。しかば、と開き直つて、さてどうする。

今、日本柔道を考えるならば、その方途は只一つ。「稽古」を復活させる事であろう。研ぎ澄ました一閃の技の妙味に憑かれて、稽古の虫になり切つた深い楽しみを味い得る、修練の場を創ることである。目の先の試合柔道にかか

ずらわる愚を捨てて、今直ちに三田柔道の本道に立直つたとしても、少くとも戦前の姿に戻る迄には三十年の歳月は要するであろう。

併し、幸な事に、学校の生命は永遠である。享け継ぐ伝統の姿を確立して、戦後日本柔道の辿つたものから、敢然と面をそむける勇氣さえあれば、「日本柔道 此処に在り」と、高らかにその証を天下に示す事が出来る。三田柔道人の総力を賭けて、先人の道を継ぐ決意を持つ秋であろう。

幸せな事に、今ならば、後ろ姿で示し、教え得る幾多先輩が健在である。今こそ三田柔道が精神革命の時であるう。

慶応義塾と柔道

中野 栄三郎

慶応義塾柔道部史第二巻の発刊を見るに至りたるは誠に欣慶に堪えざる所である。

我が柔道部は塾祖福沢諭吉先生のお声がかりで明治十年幼稚舎に誕生した。初代舎長和田義郎氏は関口流柔術の名手であつて鎌田元塾長其他福沢兄弟等多数の同好者が出来た。そこで十五年頃関口柔心先生を招いて幼稚舎の柔術に確立した。

講道館柔道は明治十五年嘉納治五郎先生に依つて大成された。古来行なわれていた柔術諸流を整齊統一して精神修養（智育德育）と身体鍛錬（体育）に依る「精力の善用」をモットーとし従来の柔術に対し柔道と名付けられた。

これが講道館柔道の起源である。

明治二十年になって南摩、小南両氏を中心として、本塾にも柔道部が設立せられ、嘉納師範の高弟山下義韶先生を初代師範に迎え二十五年三田山上に道場を建設した。これは剣道部と共にものであつたが日本学校体育道場の最初のもである。

慶應義塾柔道部の基礎を固められた初代山下先生の後を受けた、二代内田良平先生の時、明治三十七年綱町道場が新築された。百十九畳を敷き周囲に幅一間の観覧席を繞らした堂々たるものである。三代飯塚国三郎先生は自宅を開放して三光寮と称し部員のクラブであり心身鍛錬の道場でもあって常に十名内外の部員が寄宿していた。私も其一人で師範の人格にひかれて柔道一筋に若さを賭ける事が出来た。斯くして明治四十年代は後年慶應柔道部の黄金時代といわれる時期を迎えた、学業の成績でも、柔道の技倆でも、共に優秀抜群の先輩が輩出した。

そのころ対校試合と云えば、早稲田、帝大、高等師範が主な相手であって、これらの試合は学校体育行事の花形と云はれた。明治三十五年関西の雄、三高との対戦のため西下した事は学校柔道遠征の嚆矢と云はれた。これらの対校試合、遠征試合が発展して後年全国柔道選手権大会に成長した。

明治四十年に行れた対帝大戦は最も記念すべき大試合であった。帝大側は杉村陽太郎四段を大将として四段三人、三段四人、慶應側は三段二人、二段七人、其他あはせて各二十人、表面から見る限りでは誠に不釣合のものであつたが、実力に於ては全く甲乙なきものであつた。引続く好勝負に嘉納師範は途中より審判を買って出られた、珍らしい事である。当時一段で慶應の三将であつた中野は帝大の中堅沢二段を払腰に破り、三将新井源水四段と虚々奮戦中、中野のかけた大外刈で同体に落ち、打ち所が悪しかつたか中野は氣絶して仕舞つたので、審判は引分を宣した、此の傷み分は両軍にとって共に痛手であったが、帝大大将杉村四段は慶應の副将吉武、大将五月女、を降して結局は

勝を帝大に収めた、この対校試合は毎年継続の約束であったが、翌年帝大は卒業者が多く到底試合にならないからと云ふ理由で中止を申込まれ一回だけに終つた事は残念であった。

わが柔道部は対帝大戦の敗戦がきっかけとなり血のにじむ様な毎日の猛稽古の積み重ねに依り所謂慶応の四天王（平賀、中野、塚本、石渡、各四段）を主軸とする柔道部全盛時代に発展した。続いて昭和四年の天覧試合に於て「古武士の風格」と絶讃された阿部五段兄弟の攻めるも、受くるも堂々たる試合運びとては、慶應柔道の精華と讃えられるに至つた。

現時、柔道が国際的になつた事は誠に歓迎すべき事であるが、重量制の採用に依つて「柔克制剛」の妙が見られなくなつた。誠に遺憾の至りである。我が山下、内田、飯塚の三先生の如きは、何れも五尺四寸に足らぬ小軀であったが、我々塾生の猛者が挑戦しても到底勝負にならなかつた。あの有名な三船十段も又そうであつた。茲に柔道の真髓の一面向があると思ふ。

今日の場外制の採用も又どうかと思ふ、境界線を悪用するものが多く、徒に自固体に陥り攻防果敢、堂々と対決する試合振りが見られなくたつた、由来柔道の試合は礼にはじまり、中央に進み自然体にくみ、正々堂々勝負を争ふのが常道である。

今日柔道の試合を見ても少しも面白くないと云ふのが一般の批評である。柔道は人に見せるためのものではないと云ふかも知れないが、一面よりすれば矢張り多数の人々に見せて、一人でも多く柔道に親しんで貰ふ事が、柔道を一層幅広く发展させる所以ではないかと思ふ、近年柔道人口の減少傾向を見て、一層其感を深くする。指導者先生方の一層の御研鑽を切望する次第である。

福沢先生は柔道部員に対して「心身之順是柔道」「先成獸身而後養人心」、更に柔道を以て氣品の源泉智徳の模範た

らん事を期すべしと教えられた。慶応義塾柔道部はすべからく、其の伝統に鑑み流俗の外に立ち、眞の柔の道の研究、發展に精進せられん事を念願するものである。茲に聊か所見を述べて御要請に御答えする。

最後に私の思出に残る方々を挙げて見度い、嘉納師範とは、我孫子より御上京の列車中で御目にかかる事が多く、色々と教を頂いた事が思い出される、一度野田の春風館道場へ御出を願つた事があつて、その時は染筆頂いた「尽已竣成」という額が今でも光つて居る。山下、内田、飯塚の三先生、就中飯塚先生には五年に亘る長い間、懇切な御指導を頂いて影響を受けた事が大きい。

塾内では中村愛作、藤崎達磨、吉武吉雄、五月女芳三郎の諸先輩、平賀恒二郎、塙本太作、石渡泰三郎、宮部修、清水耕作、飯塚茂、等の猛者、塾外では早大の先輩佐竹信四郎、明治四十二年秋季大紅白試合で引分で、共に四段になつた宮川一貫、帝大の杉村陽太郎、新井源水、高師の神江恒雄、高商の川勝庸、井上充実、講道館の中野正三、唯一の苦手であった徳三宝等の諸君、今想い出してもホントウに懐しいが、多くは他界せられて淋しい限りではある。少年時代心も身体もが弱かつた私が、九十才を迎えた今日、比較的丈夫で毎日を平和に楽しく暮して居る事の出来るのも、柔道のお蔭と思って感謝しつつ、斯道の健全な發展を祈念して止まざるものである。

塾柔道部と私

故 坂 東 舜 一

私が慶應義塾に入学したのは、明治四十四年四月一日の昔であります。幸い勉強も好きな方でありましたので、留

年もせずに理財科を大正五年に卒業しました。その間の五ヶ年は、学校に通うと云うよりも道場に通うと云う方が適当であったかも知れません。

私は、淡路島の出身なので、中学は大阪の明星商業学校を卒業しました。友人の長尾君と若林君と三人で上京して入学しました。そして一緒に道場に通い始めました。明星商業学校は東京の暁星と同様ミッショント・スクールでありましたので、柔道部も剣道部もありませんでした。そこで梅田の半田道場とう云ふ町道場で柔道の手ほどきを受けたのが初めてがありました。

塾の道場に通うようになつてからは大勢の友人が出来ました。その中で九州延岡から來ていた後藤辰治君と橋口良吉君との附合いは実に親密となり、毎日道場で稽古をやりました。その内に三人で家を持とうではないかと云う話が持ち上り、三光町に一軒借り受けて三人の協同生活が始まり、卒業まで続きました。

その時代の柔道部には月次勝負と云うのがあり、毎月部内の試合をしたものであります。はじめは三級の茶帯を附け、慶應柔道部の部員であることを心から喜んでおりました。次第に柔道部の友人も増え私達の家に来てくれる様になりました。特に後藤君とは狩獵の仲間でもあつたので、雉子、山鳥、鳴の類の獲物があると早速柔道部の友人を呼び会食をしたものです。その頃炊事の仕事をして呉れた人に雪さんと呼んだおば様が居て、色々と援助をしてもらひ、実際に愉快な学生生活でした。

当時柔道部の連中は私達の家の事を三光寮と呼ぶ様になり、近所の人からも親しまれ、塾の柔道部の合宿所だと云うので用心棒代りに便利がられたようです。その時代の塾の柔道部の学生などと云うものは肩で風を切ると云う言葉通りで、町の人達からも塾の柔道部の学生だと噂されたものであり、従つて自ら自負心が出まして自分の身を持つ事は実に慎重でありました。

その三光寮は、柔道部合宿所の様になり、梁山泊だと云はれる様になり、余りに大勢の友人が遊びに来るものですから、柔道には結構ですが、勉強が出来なくなりました。そこで大森の鹿島神社の南側に格好の借家がありましたので、そこへ移転しました。然し、仲間の三人は相変らず仲良くやって行き、卒業する迄最初のメンバーは変りませんでした。この家は、吾々の卒業後柔道部の仲間に引き継がれました。

その当時の寒稽古と云うのは本当に寒中三十日通して稽古をするのです。大森から綱町の道場に稽古時間に間に合う様に徒步で通うのは、並大抵のことではありません。途中から先輩の島 泰次郎と云う人を加え四人で毎朝五時の開始時刻に間に合う様通い通しましたが、二年目には余り眠いのですから一案を考え、私は柔道部の更衣室に布団を持ち込み、前夜から道場に泊り込んで稽古をやりとげることが出来ました。何にしても道場は大入満員、若人の情熱がたぎつておりました。

寒稽古が終ると、先輩の幹事諸公が集つて、無欠席無遅刻の者を選考し、記念メダルが与えられたものでした。その選考の番が坂東の処に廻つて来て、坂東は遅刻があるのでないかと云うと、坂東君は前夜から来て居ますから遅刻はある筈がないよと大笑いをしたことありました。若き日の思い出であります。

思ひ浮ぶまま（昭和一四年四月講道館発行「柔道」より）

故 阿 部 英 児

ベンの走るまゝを書き止めて編輯者の為に寄稿する。

空の稽古着を相手に、上手に投げて一本取る事のむづかしい事は皆さん御存じでしょうか。

いい加減の中味のある奴より余程始末が悪いものである。

しかし相手は無為無策無力無能なので、練習さへすればわけなく出来る様にはなるが、蚊帳をたゝむにもコツがある様に只力ばかり出してうまくゆかない。

こちらの力がうまく相手に伝わらねばならない。

一部に伝わっただけでは仕方がない。

全体に通じなければ何にもならない。

弱くてゆかず、強すぎてゆかず。

おそらくゆかず、早すぎて亦ゆかぬ。

「ホド」と云うものがある。

綾昇と云う角力取が居た。足くせ、投げ業に長じ角力の早い事も特長の一つであった。その綾昇の曰く、「早い角力ならいくら早い角力でも取れるが、相手がノロマでは折角早く取つても通じない、誠に名言であると思う。

柔道の業も確かにそうである。

柔道の業は理屈に合って始めて投げ得るのではあるが、理屈を頭で考えてからでは間に合わない。反射的に理屈に合った業が出る迄の練習練磨が必要である。尚其上に何の業に限らず全て抛物線を描く様な円味を持つ「味」が是非欲しいものである。味とは何か、味の説明はむづかしい、が例を上げる事はいとも簡単である。

現役全盛時代は知る由もないが永岡十段の横捨身は其の範の最たるものであろう。

飯塚先生の大外刈、三船十段の大車、中野正三さんの内股、皆然りである。

下つて吾々当時全盛の石黒敬七氏の小内刈、釣込腰、前田武郷氏の大外刈、藤田保治氏の体落、岩崎敏夫氏の払腰、工藤一三氏の足払亦それであつた。春日町時代である。

以上の人々の外に尚多士済々、佐藤金之助氏、川上忠氏、石田信三氏、青木武氏、結城源心氏、子安正男氏等々今の水道橋では見られぬ群雄火の出るやうな稽古だつた、勝負だつた。

現在では伊藤君、大沢君それに水谷君あたりがやや味のある稽古ぶりと思われるが級も名も知らぬ少年組の諸君の中にかへつて将来に望みをかけ得る人が多く見受けられる。

楽しみな事である。

之に反し女流の中に丸味を持つ業の所有者の甚だ尠ない事は意外である。指導者の責任もあろうが、柔道は徒弟の修業でもある。人のふり見てと云う言葉の通り見て会得する事も肝心である。

誰彼と相手を選んで稽古を願う事は、むづかしい事かも知れないが、見る分には誰はどかる事もなし、是非人のふり見て我がものとして欲しいものである。

我塾柔道百年の歩みと共に

小川虎之助

今年は慶応義塾で柔道が始められてから百年、誇り高き歴史と共に多くの花形選手を世に送つた、この度部史の第

二巻を出版されるに当り内海委員長の労苦は多とせざるを得ないが、同時に從来の部史に見うる自画自贊の記事や贊詞の羅列は避けたい。

福沢先生が「先づ獸身を成して後に人心を養う」と云われて、体育を智徳と共に車の両輪として奨励されて居られた事と、関口流の大家和田先生が「和田塾」に隣接して道場を設置し、十年の春から指導されて居られた事が百年となる歴史を生んだのである。然しこの百年間には消長もあり、反省すべき点も數々多かつた。

十四、五年頃には和田先生に代つて関口柔心先生が指導に當り、二十七年には鐘巻流の渋谷先生に代つた。十五年には講道館が開館された。時は新文明の取り入れに急だつた文部省の体育奨励と相俟つて、俄然講道館流が盛んになり、古流の柔道は急速に衰へ始め、二十九年遂に中止する事となつた。

一方幼稚舎道場へは夕方から入塾前から二段であつた会津の人、南摩綱夫、二十一年には福岡の人、関口流の大原義剛、講道館の、小南英策其他数名の学生が練習を始めた。

二十二年には卒業を控えた南摩二段が小南一段を供い、山下義昭五段を師範に迎へて來た。秋には飯塚国三郎が童子寮に入り、在塾約一ヶ年、山下、小南両氏指導の下に始めて柔道を修業し、遂に終生之に専念する事となつた。

「北辰館道場」、二十年頃、麻布北新門前に住む、中川将光先生は、子弟教育の為、邸内に約四、五十坪の道場を建設して館主となり、同地に住む山下義昭を教頭に迎へた。門人の多くは学生で、その大半は慶應の塾生で、加藤直法、飯塚国三郎、小柴三郎、青木徹一、柴田一能、等々恰も慶應道場の観があつた。當時の北辰館は警視庁や講道館に匹敵する道場であつたが、中川先生の逝去と共に閉館された。

加藤直法は若年より剣道を修行し、二十六年に入塾してから専ら柔道の修行に励み、二十九年に卒業した。余は當時の柔剣道談を數々拝聴した。後年苦学の青年達に学資等の面倒を見て居られた。

明治二十九年に、武徳会が創立された。

明治三十年代から各校とも、招待大会や対校試合を挙行する様になつた。本塾での招待大会は、三十一年春の第七回大会からである。

三十五年四月、山下師範率の下に、四高を破った三高に挑戦して破れたのが、本塾始めての対校戦であり、始めての遠征であった、当時の三高には足技の名人、川勝正之有り、主将として三高柔道部を統率して居た、三十五年六月、早大に挑戦し、之を迎へて対戦する事となつた。当時の早大は天下無敵と云われた時代で、主将には日本柔道史に盛名を残す前田光世三段有り、慶軍は僅に初段若干名、対校戦など出来る陣容ではない、従つて早大側は前田三段を除き、主将に三段候補の松代一段、次將に河野初段、慶軍は主将に佐竹三段（早）、次將に慶応の藤崎初段、中堅のみが早慶に分れ、下部は早慶の混合、試合は早軍の松代主将が抜群の奮斗をして慶軍に迫り、藤崎初段が四十分後漸く打止め、佐竹信四郎（早）主将を残して勝つた事になつた。

三十六年、三高に復讐戦を申込んだが、前年度慶応側の某誌に審判が不当であつたと云う記事を掲げた事が不満で断つて來た。慶応側では「試合に勝つて審判に負けた」として居た、この負けた時の愚痴と不平は慶応陣の通弊として続いて行つた。

三十六年九月在籍十五年の山下師範は北米の招待に応じて渡来された。

三十六年十一月、主脳部が去つた早軍より、慶軍側に段級を揃へての挑戦有り、之を迎へて慶軍四十五名、早軍は不参者有つて四十三名、慶軍の宮部先鋒が八人を抜いて、番狂はせとなり四名を残して慶軍側の勝となつた。慶軍側では二回とも勝つたとして喜んだ。

三十七年九月、に三田綱町のグランドの一角に、柔剣道の新道場が建設された、この時内田良平四段が、師範とし

て迎へられた。之より道場内は俄然活氣汪溢、学生は始めて柔道の真髓に触れた。その活況振りは十月七日午後二時に開始された紅白試合は、紅軍五十一名、白軍五十二名、參觀者立錘の余地なく、師範が「白軍の勝」を宣告し、万歳を三唱した時は正に午后十一時、即ち内田先生の声望の致す所である。

三十九年二月七日には、一年有半に亘り熱心に指導された内田先生が、朝鮮統監府の顧問として赴任されるに当たり、送別試合が挙行された、試合の茶話会席上、告別の辞を述べられ、『柔道部が盛大になつたと云はれるのは、偏へに幹部諸君並びに、部員各位の努力に依るものであつて、若し多少でも自分が、部の為に尽したとされるならば、夫れは向後に現れるものであるとして、部員の自重と将来を諭された。

三十九年五月の末、内田師範去つて三ヶ月、飯塚國三郎五段が迎へられて師範となつた。之より斯界の所謂「慶応の飯塚」「飯塚の慶応柔道」時代が続くと共に、柔道の有り方も変容されて行つた。

四十年十一月十四日、帝大道場に於て、當時有段者五十余名を擁する、対帝大戦が挙行された、試合は嘉納先生自慢の愛弟子杉村陽太郎を主将として、四段三名、三段四名、二段二名等、総数二十名、慶軍は三段二名、二段七名等、総数二十名の精銳戦、結果は杉村四段が吉武三段と五月女三段を固技で破つて、帝大の勝となつた。慶応陣は高位陣と対等で戦つたとし、且つ「審判は神聖なり」の代表者嘉納師範より「模範的な試合であった」との講評を得て満足した。

四十一年の秋、一部の人で「飯塚先生後援会」が組織された。之は師範の生活安定の為であつたが、大正期に入つてから昇段等に関する不平が次第に起り始めた。大正十五年には部の事業拡大の為に、柔道部出身者全部を会員とする「三田柔友会」と改めて新発足する事となつた。

大正三年十一月十五日、高師の大塚道場に於て、対高師戦が挙行された。高師には実力抜群の岡部平太が、今春二

段四名、三段三名を投げて四段となり、之を主将として桜庭、富田、東口等、錚々たる選手二十九名、慶軍は四段飯塚 茂を主将として、菅井、鶴淵、中野等二十九名、試合は立業の岡部が殆ど立たず、寝業でのみ戦はんとした飯塚を、主将時間の二十分が延長々々で、五十余分、立った所を合業で岡部が勝ち、慶軍は負けとなつた。然るに後日負けた不平が起り、鶴淵三将が責任を負はされて、道場より除名された。翌年深田道場で会つた際事情を詳細に聞く可くして聞けなかつた、先鋒で破れた植木義雄は「鶴淵君丈が責任を負はされて氣の毒だつた」と言つていた。この頃より部内に譖代、外様と云う言葉が聞かれる様になり、やがて道場離れして去る者、短艇部や蹴球部、弓術部へ鞍替へする者が出る様になつた。

大正五年四月十一日、飯塚師範引率の下に、四段中野森藏を主将とする一行十五名が、京都に遠征した、途中静岡と名古屋にて稽古をし、京都に於て武專と対決した。武專は福島四段以下三名を残し慶軍慘敗。

大正六年九月二十四日、飯塚七段引率の下に、中野以下四段二十九名は、京都武徳殿に於て、武專の福島清三郎四段を主将とする京都軍と対決して、引分、翌二十五日、大阪武徳殿に於て、大阪連合軍と二十八名宛で対戦して二名を残して勝つた。翌二十六日、神戸の内田順道館に於て、沢田義男四段を主将とする神戸連合軍と、十八名宛で戦つて引分、之より「我が柔道部は負けると強くなる」と云う常習語が出来た。大正八年九月、飯塚師範、中野助手引率の下に、京都武徳殿に於て武專を主体とする京都軍と、各四十八名宛で対戦し、四名を残して優勝し、次で大阪武徳殿に於て、四十八名宛で対戦し、七名を残して優勝した。

之より師範以下は「我が柔道部は強し、優秀なり」として学生柔道界の動向も知らず、研究もせず、「道場内は和氣謙々として」と喜んで居つた、道場は遊戯場に非ず、所謂六高柔道部歌の「青き畠を血に染めて」の鍛錬の場でなければならぬ」大正十四年九月、遠征を控えて浅見四段を五段に、その他を昇段させて遠征の途に着いた、他校の

逆である、一行は飯塚師範中野助手引率の下に、三十余名が京都武專と対戦した、武專は四段二名、三段十四名、初段九名、計二十五名、慶軍は五段一名、四段二名、三段九名、二段八名、初段四名、一級一名、計二十五名、試合は浅見五段が奮斗して三段五名を抜きたるも、村山三段の跳腰にとばされ、武專は五名を残して勝った、浅見五段の試合中に、飯塚師範は審判者の耳許へ近付き、素直に柔道衣を持たせる様にと注意を与え、參觀者に不快を与えた。

翌日、大阪武徳殿に於て大阪連合軍と対戦した、大阪軍は、四段二名、三段十名、二段十二名、初段八名、一級二名、計三十四名、慶軍は五段一名、四段二名、三段九名、二段九名、初段九名、一級四名、計三十四名、試合は立業の中外商業の大谷晃二段に、慶軍二段二名が上四方固で押へられ、三人目に浅見勇二段が漸く引分た、又寝業を主とする医大の田中二段が桐山三段を大外刈で、五島次雄三段を送足払で、久徳三段を逆で、井上三段を大外刈で、徳永三段を逆で破り、五人目古賀三段が引分た、同じく寝業を得意とする医大の渡辺二段は、岩崎三段と松田四段とを、上四方固で下し、阿部芳郎四段を逆で下し、浅見五段が漸く跳腰で破り、次で寝業の和田二段を大外刈で下し、小寺二段を内股で下したるも、立業の上田文次郎三段に上四方固で破れ、十一名を残す惨敗となつた。當時余は大阪に在職して居り連日大阪武徳殿其他に於て、選手達とも稽古をして居たが、之れ程、負けるとは意外であつた。試合後慰労の会の席上、中野助手は師範より「君の指導が悪い」と叱責されたのは氣の毒であつた。

昭和十三年、清水正一先生は学生の懇望に応え、師範として就任された、斯界では名師範を迎えたとして居た、然し積年の弊風が一掃されず落日は日に日に沈み行き、今や三流校とも云われる時代となつた。「柔道部のガン」は大正八、九年の頃、柔道部幹事の推薦制を、選挙制にす可し、との与論が沸騰した、或日幹部会を開くから是非出席して呉れとの事で道場へ行つた、二列に対立して居り、一方は松永進一を中心にして、七、八名、所謂外様組、一方は小林武次郎（普通部出身）を中心にして譜代組が七、八名、激論最中であつた、松永は先輩が認めないと反対して居

たが、遂に今一度相談するからと云ふ事で解散したのであるが、実現さざる儘に終った、其後昭和に入つてからも、塾の柔道部は不愉快だと云う声があった。後年、余は吉武吉雄氏から、「塾の道場は普通部出身者が中心となって運営して行かねば柔道部精神が判らぬ事となつて了う」と聞かされた。

兎も有れ遠くなりつつある当時の柔道部時代が懐かしい。柔道は良いものである。

道場の思い出

福田与志三郎

明治の終り、慶應義塾商工学校に入学して、間もなく柔道部にご厄介になりました。私が入部した頃は、成年組と幼年組とあり、成年組は四級から権帶、幼年組は五級から紫帯で、夫々一級まで進むと、黒帯を目指して講道館の勝負に出るのでした。普通部、商工学校の一年、二年で入部したものは、概ね幼年組に入りました。

幼少の私達は、稽古をするより、広い道場で遊ぶのが面白くて通つたようになります。遊んでいるあいだに、試合などもあって、自ずと紫帯に憧れるようになりました。

未だ紫帯にほど遠い頃のことでした。部内の紅白試合があり、有段者の試合となつて、小柄な塚本福治郎さんと、どなたか忘れましたが筋骨逞しい大きな人との試合になりました。塚本さんは、日頃幼年組の面倒を、よく見て下さつていましたから、私達は自然塚本さん舐員なので、氣を揉んで見ておりました。一瞬の動きに、はつとしたときは既に、大きな方が、美事宙に舞つていました。跳腰でした。驚歎と同時に、これこそ柔道だと、幼い心にも強く感じ

ました。

いつぞや、跳腰の名手岩崎清一郎さんに伺がつたことがあります。『福ちゃん（塚本さん）の跳腰は、下から持ちあげる独自のもので、随分直似をしたが、ものにならなかつた』と。

大正六年と八年の関西遠征には、私も参加しました。対戦相手は、京都武徳会を中心とするオール京都（第一回引分、第二回勝）大阪武徳会支部を中心とするオール大阪（第一、第二回共勝）神戸柔道有志（第一回引分、第二回対戦なし）であります。大正六年のときは、大将中野森蔵、副将岡善次、八年のときは、大将松永進一、副将阿部大六と云う陣容で、一行三十数名でした。

対京都第一戦は、中野森蔵、福島清三郎両大将の見ごたえのある熱戦の末、引分に終りましたが、三人抜きの殊勲を挙げた山田菊雄さんの払腰の美事さは、今も記憶に鮮やかです。又その第二戦で、背丈はあっても瘦身の花田重起さんが、六尺豊かの巨大漢と対戦し、相手の力をうまく躱して、締業で勝った巧みさには、心惹かれるものがありました。その巨大漢は即ち、後年塾に入つて活躍された浅見浅一さんです。

一級、初段の頃は稽古が実に楽しく、岩崎清一郎さん始め誰彼となく稽古をつけて頂きました。左業を苦手とする私は、左業が得意の坂東舜一さん、永井元孝さんに、努めてお願いしたことを覚えて居ります。飯塚国三郎先生にも随分お世話になりました。小さな体軀ながら、恐ろしく胸幅が広く厚くて、一分の隙もない、と云つた感じでした。その体捌きは流れるように円滑で、実に巧妙な崩し方をなされました。得意は左大外刈でした。中野正三先生には、切れ味するどい独特の内股で、空中舞いばかりさせられました。いくら悔しがつても、こちらからは、業有り程のまぐれ業さえかかりません。

この頃、塾の連中は打ち揃つて、講道館の稽古に行くことがありました。私達は、中野先生から相手を指名される

ことが度々で、皆大汗をかきました。今では、そのなかで、深田道場の小川虎之助さんと、講道館の岡野幹夫さんの一人だけが記憶にあるばかりです。

阿部大六、英児によつて代表される私達同時代の仲間は、強弱は別として、何か一癖も二癖もある業を、誰もが持つていたようだと思うのです。これは、輝かしい塾の伝統、先輩諸兄の温かい指導の恵みによつて、はぐくまれたものと、深く感謝して居ります。

私が三段か四段の頃、出羽の海部屋の関取衆が、時折道場に遊びに来て、稽古をしました。横綱柄木山、大関大の里、小結（？）福柳その他の関取です。柄木山、大の里とは、私も稽古を致しました。柄木山は、背負投に行くと、腰と腹に力を入れて、逆に跳ね返します、実に理に叶つた受け方をすると感心しました。阿部兄弟は、大関と横綱を投げたように思います。なごやかな楽しい稽古でした。

大正十一年秋の講道館の紅白勝負のときだと思います。一方の大将は早稲田大学の石黒敬七四段、一方は塾の阿部英児四段で、そ頃の学生柔道界の双璧です。石黒四段は、三將 子安政男四段を鮮やかな小内刈に続く副将佐藤金之助四段も投げて、いよいよ英児四段の登場となり、場内のざわめきは緊迫の空気に一変して、堂々たる勝負となりました。英児さんは右大外刈で、殆んど一本かと思われる『業有り』をとり、その後も優勢裡に時間が来て引分となりました。当時は判定制度がなかったのです。如何にも英児さんらしい理智的な試合運びで、その情景は未だに眼に残つて居ります。

あの百十九畳の畳と、汗くさい柔道着の感触を思い起す私の脳裡に、浮び消える懐かしい誰彼の面影は、遠い昔の思い出を、とりとめもなく、果しなく、誘つてやみません。（昭和五十一年十一月）

大正時代

阿部秀助

大正四年から十四年まで、綱町道場に通つた。見上げるような大学生が、美事に倒れて呉れるのが嬉しい普通部一年生であった。白帯が紫帯に変り、やがて黒帯に。いつか、自分が、ほんとうらしく投げられて見せる立場にいた。ほかに、楽しみごとの少ない時代ではあった。それにも、朝、うちから学校へ、午後、教室から道場へ、夕方、疲れてうちに帰る、と言う、思えば単調な毎日を、よくまあ厭さずに、と自分でも思う。ひたすら、柔道が面白く、道場が愉しかった。

顧みて、殊にこころよく思ひ起されるのは、上級、下級を問わない和やかな雰囲気と、勝つことよりも、先ず、いさぎよく闘うことを良しとした、あの頃の柔道部の氣風である。それは、明治維新のあとに唱えられた自由、平等の思想と、節を尊ぶ武士たたぎとの融合した、福沢先生の訓えに通じるものであつたかと思う。或は当時の、塾風の一つの現われであった、と見るべきかも知れない。

昔の柔道部と今の柔道部が、多くの点で違うのは、過去五十年の間に、我が国に起つた激しい変遷と、それに伴う学生生活の変容を思えば、寧ろ当然のことであろう。そのうえ昔は、あとから出来た四ヶ谷の医学部は別として、幼稚舎から大学まで、総てが三田にまとまっていたのに、今は夫々各地に分散して在るから、部の運営も余程むづかしくなっている筈である。此の著しく異なつた時代を背景とする、二つの柔道部を比較して、一概にその善し悪しを言

うことは出来ない。又、仮に、昔の柔道部がどんなに良かつたとしても、それをその儘、今の柔道部に当てはめればよい、と言う訳には行かない。併し昔の、あの愉しい雰囲気だけは、いつまでも遺して欲しい、と切に思う。

変つたと言えば、柔道の国際化について、昔から守られた規則を、軽々しく改変した国際審判規定は、近來最も気に入らぬものの一つである。あれは、何がなんでも勝ち負けを決めようとするあまり、柔道の本質を全く無視して作られたもの、と言うはかない。此の頃の柔道はつまらない。とよく言われる時は、此の審判規定に妨げられて、試合が本来の柔道とは程遠い、力競べに堕しているからだと思う。柔道の特質を曲げてまで、その国際化に迎合する本末転倒は納得出来ない。柔道のメツカとも言うべき講道館の猛省と、毅然とした態度を、強く希う。

第二次世界大戦の後、日本に漸く民主の思想が浸透しつつあると言うのに、スポーツ、特に一般学校の運動部だけが、昔よりも却つて封建的になつたかと見えるのは、何んとしたことであろう。しばしば新聞沙汰となる運動部内の不祥事の多くは、ただ一学級ちがうだけで、忽ち先輩、後輩の上下に格付けする、それは私に嘗ての軍隊生活を思い出させるような階級制と、勝つことのみに執着する、誤ったスポーツ観のせいではなかろうか。

私達の頃は、在学生である現部員に対して、卒業した旧部員を先輩と言つたが、例え卒業生であつても、面と向つて『先輩』などと、実の無い呼びかたはしない。ちゃんと、その人固有の呼び名で、○○さんと呼んだ。○○の中味は、姓であつたり、名であつたり、時には渾名のこともある。況して在学生同士の間に、所謂先輩、後輩と言う改まつた意識はない。上級生は先輩ではなくて年長の友、下級生は後輩ではなくて年少の友、その間に自から長幼の順があつたのは、氣の合つた兄弟の間柄にも似ていた、と言えよう。そして或る者はすすんで厳しい稽古に熱中し、或る

者は寧ろ道場の気分に親しみ、なかには、氣の向いた日とか、都合のついた時だけ顔を出す者もある、と言ったよう
に、夫々自分の望む形で、柔道部の生活を愉しみ味わっていた。正に、スポーツは『しごくもの』ではなくて、自発
的に愉しむものであった。斯うしたなかで恵まれた、年長、同年、年少の友との、永きは既に六十年を越えて、なお
変わらぬ友誼を思う。

年老いて人は、若い日の懐かしい回想を、一層美化しようとするものだ、と言う。それにしても、あの綱町道場の
自由な空氣と、勝つことのみが目的ではないとした精神は、好ましく、忘れがたい。

昭和五十一年秋

早大から見た塾の柔道部

早稲田大学柔道部O・B
山本秀雄
師範・元教授

部史発刊をお祝ひ申上げ、塾柔道部のより御隆盛を心から祈念致します。

大学におきまして、夫々のクラブ活動を通して早慶両校の栄光の歴史は古く他にその類をみないのではないかと確
く信じております。

柔道関係にいたしましても、お互い過去学生連盟の試合出場は勿論のこと、特に早慶が鎧を削り、持ち味を出し切
つて闘かつた数多くの試合の想い出が脳裡を去来します。

私が大学に進みました昭和九年に、中止されておりました高等部（旧制）の早慶戦が復活し、その第一戦が、水道
橋の講道館で行なわれました。

塾の大将岡崎君が壮烈な試合を展開し、五人を抜き去り、大将同志で引分に持ち込んだ熱戦は塾の魂を表わしたものとして永く語り続けられました。岡崎君はボルネオ・クチンの戦線で戦死されました由、惜しい人を失ないました。

昭和十二年、私が大学を卒業しましてから四年目、オール早慶戦に発展し、戦時中の空白はありましたものの、現在まで脈々として続いておりますことは、御同慶に堪えないところであります。

二度私は召集を受けましたので、総ての試合を見ることは出来ませんでしたけれど、空白期間の方々と同じように、私はあの晴れのしかも伝統の早慶戦参加の味を知らない一人でもあります。

従いまして、戦後大学の教員として上京しましてからは、関係者として試合に参列しますものの、熱戦を続けられる両校の選手諸君を羨やましいとさえ思ひながら、いつも観戦してまいりました。

過去試合で活躍され、立派な成績を挙げられた、羽鳥、大館、熊切、山際、福田、河上、大城、黒部の方々や、蔭の力として尽された方に心から敬意を表すものであります。

この道を通し、四十年にも近く、深い友情を示して頂いています清水正一師範の関係もありまして、塾の方々には特別の御交誼をいただいております。

戦後撫順の満鉄クラブでの毛利さんとのこと。或は、全日本実業団の岐阜での大会の帰路、清水先生に従いまして、任地の名古屋に、羽鳥さんをお訪ねし、数々の御もてなし受けた楽しい一夕。成毛さんに御迷惑かけた日。山際に招ねかれた大阪の夜。福岡での新宮さんとの旧交。三田の長嶋さん宅での団欒。山崎さんグループからの御指導。皆さんのが呼ぶので愛称をついうつかり名前と思い込み気易くお呼びしていた橋本君のことなど。早慶戦の想い出が強烈であればあるほど、社会生活に入つてからも、道の同志とし、特に早慶の強い絆が固く結ばれている結果と信

じております。

清水先生のお勧めもあり、早慶戦の終つたあと的好日に、交互に道場で親善の会合を持つておりますが、終つてからも夫々の学年別に深い友情の会を行なつてゐるようです。どうか社会生活に入つてからも、各職場を通して、手を取り合つて、両校のより隆盛に力を尽されますよう乞い願うものであります。

数年前、塾の柔道部が米国遠征しました折、山田公平君からお忙がしかつたのでしょうに、一葉の絵葉書で遠征中のこまごまを書き添えられた挨拶状を頂き感激しました。

また先頃の全日本学生柔道大会の日に、日取りの都合もありましたが、正午に部のO.B.の結婚式があり、前から挨拶の依頼も受けて居りましたので試合を中座しました。留守中明大対早大戦があり、その試合の内容を、羽鳥さんが、ことこまかにメモし私に渡してくれました。こんな心遣いが嬉れしく、あれもこれも心温たたまるものばかりですでの、ここに申し添えました。

この三月末、私は定年で二十三年間の早大の教員生活を終えました。その間の皆様の御配意を感謝すると同時に、これからもより深い御交誼をお願い申し上げ、表題にそぐわない一文となりましたが、私の責を果たし度いと存じます。

医学部柔道の発足

渡辺重男

本年八月初旬内海君から突然電話があり柔道部百年史に掲載するため、慶應医学部柔道部発足当時の状況を記述されたいとの依頼があった。突然のことであり、医学部卒業後四十年も経過し、かつ何等の記録もないのに一応おことわりの返事をした。八月中旬再度電話連絡で記述の懇請を受けたので、医学部柔道部員名簿を開いてみると、安東喜四夫先輩亡きあと私が会員の最年長者であるのを知り、往時を思い出ししつつ筆をとることとした。記憶も断片的であり曖昧な点も多々あると思うがおゆるしを願いたい。

私は岐阜県立岐阜中学校在学中より柔道にうちこみ中部地区に於ては一応柔道名門校として名声をあげ、その主将として活躍したつもりである。医学部進学が志望だったので慶應義塾普通部に転入学し、柔道とは一切絶縁し、勉学一途の心算であった。而し転校間もなく普通部対商工の塾内対抗試合があり、商工には、五島勇雄、村越信行と云う有力な有段者が活躍しており本年度試合は普通必敗の評があるので、是非主将として出場してもらいたいと勧誘され、何となくひきうけてしまった。結果は五島君には崩上四方、村越君には絞めて勝ち普通部を優勝にみちびいた。爾来又転校時の前にもどり柔道部に入部した形となつた。普通部時代の対校試合、北関東地方への武者修業等も愉快な思い出の一齣である。

願望の医学部予科に進学後、早慶柔道対抗試合（当時は全学でなく塾予科対早稲田高等学院）亦、塾対四校連合対

抗戦等数々の対抗試合、練習試合に出場し柔道への執念をもやしたものである。医学部予科を修了し、三田から四谷の医学部にうつってからは綱町柔道場へは遠路でもあり學習に追われて次第に足も遠のいたが、たまたま當時体育会角力部選手であった医学部先輩、名倉厚君（故人）と共に道場通いをつづけていた。

昭和十年から昭和十一年初めにかけ如何にしても医学部に柔道部を結成したいと思ひ、安東喜四夫先輩にも語り合つた。理由は三田綱町柔道場までの往復時間のロスである。當時医学部には渡辺重男（医療法人千手堂病院長）以下鈴木 完（故人清水市立病院副院長）、水ノ江公英（北里研究所長）田中 博（横浜市衛生研究所）山岡三郎（元横浜警友病院副院長・開業）矢島 正（開業）水野祐正（開業）遠藤藤吾（国立板木病院）池田亀夫（現慶應大学整形外科教授）等の面々が練習道場確保のため奔走した。東京医学専門学校を初め、町道場も數カ所交渉したが不調に終り、一同落胆のあまり部活動中止にまでおいかれた。燈台下暗しとでも云うか最後に全く近くにある四谷警察署道場を思いついた。

たまたま道場管理の間、
岐阜県大垣市出身の岡田正義（よしのり）巡査部長は、當時講道館四段、極めて厳格ではあったが温情熱心で、私の道場確保に困却しているのを聞き、同郷の誼も手伝ってか週一回貸与との許可を得た。柔道場の確保により練習を開始、昭和十一年八月 東日本医歯薬柔道大会参加にまで発展した。部費として体育会柔道部より年額一〇〇円の補助をうけ出納は安東喜四夫先輩に依託した。度々安東氏の名前が出るので御遺族の方々に哀悼の意を表すとともに同氏が卓越した名選手であったことを付記したい。

昭和五年早慶柔道対抗試合のコーチとして教えをうけた当柔道界の第一人者として名声のあつた牛島辰熊氏と安東氏と練習試合の様相は今もつて私の脳裏に浮ぶのである。私も数多くの名試合を観戦したが、あの時の両氏の戦は全く猛虎の闘とも形容すべき試合であった。牛島氏の試合は積極的で相手に息もつかせないと云う積極的戦法は定

評であった。安東先輩の斗志も亦極めて攻め一方で約三〇分間の練習試合は全く息つくひまもなく続けられた。壯絶と云うよりもむしろ凄惨とも云うべき試合であった。私はこの闘いを立技に於て互角、寝技に於ては安東先輩に六分の利ありと判定した。この三〇分間は息をのみ手に汗を握るとはこのことかと今も尚思い出される、先に五島三雄先輩を失い又安東先輩を失ったことは惜しんでも余りあるものであり、三田柔友会の至宝を失ったと云つても過言ではないと思はれる。両先輩の御冥福を心からお祈りする。

私は現在郷里岐阜県に於て岐阜三田会、岐阜県三四会（医学部同窓会）会長を兼ねている。毎年三月には新入会員歓迎会を、八月には県連合三田会を開催している。本年八月総会には前柔道部部長、石川忠雄塾長の臨席もいただき塾の近況、将来の抱負を拝聴した。

右記両会合には学生 塾員 父兄も参加されるので毎回私の申しのべるテーマは「広く良き友を得ること」のくりかえしである。

広く良き友を得るには同級生のみではなく体育会とは限らないが何かのクラブに入会し官学の亜流ではなく、私学ならではの特長を身につけるべきだと申しのべている。

私は塾最古の歴史を誇る柔道部に籍をおき、良き先輩、同輩、後輩を各地に持っているのを生涯の誇としている。終りに塾柔道部の発展と柔友会々員の向後ますますの繁栄と健康を祈念しつつ筆をおく。

三田 三綱寮の思い出

田 岡 協

私が三田綱町道場の間近に三綱寮を開いたのは昭和十三年四月十日であった。寮名の由来は三田綱町寮の意味であるが、古くは明治末年から大正初期にあったと思われる芝白金飯塚師範邸の三光寮、ついで大正中頃の麻布菅原邸の三光寮に因んで名づけたものであり共に塾柔道部有志の柔道修練と勉学の場としての合宿を目的としたものであつた。

三綱寮創立の動機についてふれてみる。明治、大正時代の三田柔道は講道館紅白試合には一方の主力を占め、その実力は斯界を圧していたが、昭和九年復活第一回早稲田高等学院対塾予科高等部戦は塾大将将岡崎四段の大奮戦で六人目早大将永光四段と引分け、辛うじて面目を保ったものの、塾の頽勢は明らかであつた。

早高、慶予対抗抗復活は全早慶を前提としており、之を機に広く人材を集めて塾柔道の復興を目指し、昭和十年以降先輩の積極的努力で続々有望選手が入学するようになって来たわけである。しかしながら兎角血氣旺んな地方出身の学生は道場だけではもの足りず市井において武勇伝を發揮脱線しがちであり、学期末ともなれば単位不足で先輩を煩わすこととなつた。

ときには極東では満洲事変から支那事変と太平洋戦争への前夜であり、ヨーロッパでは第二次大戦が刻々と迫つており、学生の行動も柔道部員に限らず規を逸脱しがちな時代であつたが三田柔道として放置出来ない問題であり、主と

して地方出身部員の融和と勉学の場として設立したものである。

三綱寮設立初期の寮生である赤塚 豊、藤川恒男、飛田常吉、佐藤昌一君等は既に亡いが、安田義也、園田 康、始良源治、平 弥一郎君等が名を連ねていた。

統いて入寮した佐藤 清、白浜一郎、杉山一郎君も戦死又は死亡している。

私は塾の第一回柔道部アメリカ遠征（昭和十三年）より帰国後助膜炎を患ひ十四年十二月退寮したが、其の後石渡英二君が寮長となり寮名も興武寮と改めて大館三郎、吉川太兵衛、小坂修康、山中文男君等が入寮し昭和十九年頃迄存続したようである。

尚三綱寮設立に際し精神的、物質的に援助を願つた方々の第一に菅原 浩先輩があるが、氏には個人としても塾入学以来卒業迄一方ならぬ御世話になつたが寮創立後間もない十三年十月に亡くなられている。

寮設立迄には毛利松平、寮生の健康相談には安東喜四男、又寮に近いこともあって峰岸鎮治の諸先輩にお世話になつたことが想起される。

又寮の借家保証から発足後も物質的に人知れぬ後援願つた三田通り「ときわ天ぷら屋」故古谷八重さんも忘れられない人である。

三綱寮は綱町グランドを出て麻布三ノ橋方面へ向つてすぐ左の綱町一ノ一、現在二ノ一九の広田さんの持家で二階家、延三十坪位であったと思われる、道場に近いこともあって部員諸君に何かと活用して貰い寒稽古などは泊り込み部員で結構賑わつたように記憶する。

さて スタートしたのはよいが食器など揃えるのに苦労したが、峰岸先輩宅から頂戴もしたが、若者の茶目氣から機会あるごとに食堂あたりから失敬して来る寮生もいた。炊事は何れ婆やさんでもと考えていたが適當な人もないま

ま交替でやつていたが、食う方は旺盛な連中も作る方はさっぱりで、小生の弟が当時二段、帝京商業の生徒で叔父の家に居たのを連れて来て飯炊きをやらせたり、綱町道場で稽古したりして、寮生に可愛がられていたが、十五年三月卒業後霞ヶ浦の甲飛練に入り、後十八年二月レンネル島沖海戦で空に散華した。二十才、講道館贈四段。

最後に三綱寮のリクリエーションの一節を紹介する。

十四年十月十五日（日）夜十時芝浦発で大島へ一泊予定の懇親旅行に行く。赤塚、渡辺、安田、園田、平と小生の六人、藤川は都合で不参加したようである。四百頓の芙蓉丸は朝五時元村へ着いたが生憎の雨で島見物もままならず波浮港まで行つて客引の云うまま上総旅館へ宿泊。

翌十七日は思いがけない暴風雨となり宿に閉込められる破目となり、もう一泊の宿賃が心細くなる。

十八日ようやく雨が上つて、三原山までのバスはどう云う訳か　うまく無賃乗車した後タクシーも八合目まで一円也に値切り　まだ強風の吹く中を外輪山を歩いて火口へ着く。

火口は煙で向う側がたまに見える程度で火底が見えないのでよく見えるようと安田、赤塚と小生も小便をかけたが、御神火の罰もなかつが何の効果もなかつたようだ。昨日の嵐で桟橋が流出しておりハシケで高波に半身ズブ濡れで本船へ、心身共に疲労困憊して夜九時頃芝浦帰着した。

兎に角、一騎当千の猛者が屯して居た三光寮は、いつも明るい若人の熱気が横溢して居たが、互に砌磋琢磨の場として大過なき青春を果し得たものと自負するものである。

故安東喜四夫先生と寝技

—その医学的観察—

山岡三郎

安東喜四夫と云えば、昭和初期、津山中学で全国優勝、松山高校で全国準優勝の副将として、寝業では全国に轟いた人でした。（当時関西の中学校や全国高校は寝業専門だった。）

官学からは珍らしく昭和四年慶應の医学部へ来られ（本一が、欠員無き為、予科三へ）、その秋の早慶戦では「敵は逃げる一方だったの、汗一つかかなかつた」とよく笑話にしておられました。

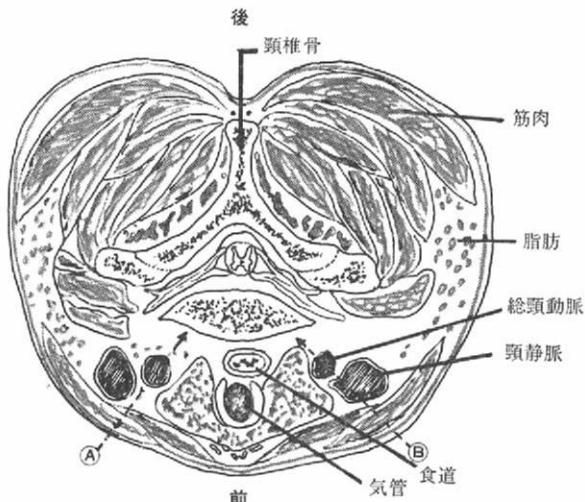
私は昭和一〇年、予科三年の時から柔道を始めたもので、一人で綱町道場へ入って行き、右手前隅にボンと座つていたら、主将だった今川敏夫さんに見付かり、コッ酷く投げられたのが、初日でした。（その頃全国中学校は、柔道は正課であり、受身だけは出来た。）そして、丙組とかに編入されました。

その頃、医学部にも柔道部を作ろうと考え、いろいろ探つてみると本三に渡辺重男さんを始め本一、鈴木 完さん、本一、水之江公英さん、予科三に、江口、近藤、小生、予科二に永野、矢島、予科一に、遠藤、蒲生等と黒帯、白帯取り交ぜて、同好の士が居るのが分り、五月頃、発会式、初練習を、四谷警察署の道場を借りて行ないました。その時、背は低いながら、肩幅の広いガツチリした先輩が、来られましたが、その方が、有名な安東先生とは、初めて知りました。

本一になると解剖実習で毎日六一七時迄かかり、稽古も出来なくなりましたが、本二になり又練習を始めた時、安

効果の大きい絞の急所

(第七頸椎部断面)



註 下顎の屈曲部の下を押えると脉が触れるそこを点線の方向に絞める。

東先生に、親切丁寧に教えて戴いた時の感激は今でも忘れません。少し専門語も混りますが、記述してみます。

- (1) 「寝技」の基本たる「押へ込み」は、先づ相手に逃げられない事だ。それには、先づ、絶対に相手の腰を押へる。前からなら両手で、帶を扼むか、背後からなら、両股で挟むかして……その確保が出来てから、相手の動きをみながら、自分の得意技に持ち込め。要点を一つ一つ確実に決めてジックリ攻めろ。腕や足を押へる時は、その関節部を押へれば、最も力少くて効果が大きい。自分の体の重心は、出来るだけ低くしろ。
- (2) 「絞め技」は、所謂「のど」を攻めるのではない。気管には、弾性のある輪状軟骨があり、周りは軟部組織だから、空気の出入を絶する事は、先づ出来ない。又息を止めても、普通、柔道をやる様な人間なら一分間は、楽にもつ。両側の頸動脈を、頸椎骨に向って押しつける。頸動脈は直徑1cm位しかない。之を、硬い骨に向つて押しつければ血流を杜絶させるのは、訳はない。

血流が杜絶すればスグ氣を失う。又筋肉は、一方向にしか収縮出来ない。その方向から押し進めば、筋肉の抵抗は無に等しい。首にある最も太い筋肉は、胸鎖乳頭筋（耳の後の骨の突出部から、斜下前に鎖骨と胸骨との関節の方へ走っている筋）だ。此の筋肉を収縮させている時（頸を下に引きしめている時）前方から、之を引き上げようとしても（羽交絞）仲々困難だ。之に反し、後から、耳の下から頸の下の方の筋肉と同じ方向へ、手を進めれば、大した力を要らない。（送襟絞）人差指で親指をかぶせる様にして拳を握り、その先端から押し込んで行けば、入り易い。そして頸動脈より先の方迄、入つたら、反対側の拳を握り、（勿論反対側の手と協同動作で……）手首を、自分の胸の方へかえす様にして、頸動脈のあたりを、頸椎骨に向つて押えつける。（第一段階としてシッカリ後から、両股で、相手の腰を挟み、又反対側の手で、相手の腕下から、稽古着の前襟を拒んで、相手を逃げられない様に固定しておくる事は云う迄もない事だ。

(3) 「関節技」出来るだけ深くで（肩近く迄入つて）両股で相手の上腕をシッカリ挟みつけて逃げられぬ様に固定する事。後は、両腕で、相手の一本腕を引っぱるのだから、余程の力の差が無い限り、こちらが勝つに決つてゐる。相手がシッカリ自分の稽古着を拒んでいたら、親指と人指指の間を（どちらかを掴んで引っぱれば）こぢ開けられる。ニックリ落着いて、挺子の理を利用して、相手の腕の先端たる拳を掴んで引ッパレ。そして相手の親指と小指とを結ぶ線線の方向へ「逆」をとれ、そうすれば、自づから、上膊骨先端の「窩み」に、前膊の尺骨（外側の骨）の上端の突起部が、ハマリ込み、然も、尺骨と橈骨（前膊内側の骨）間の関節が、その上にピッタリ重なつて、どちらにも動けなくなる。絶対に逃げられない。全体として、寝技には、やはり力が必要だ。基礎体力の養成に努める。

解剖実習生理学を終つたばかりの私には、此の説明が、誠に合理的であり、鮮明に刻み込まれました。その夏、郷里鹿児島に帰り、第七高等学校でミッヂリ寝技の練習をやりました。幸にも水島師範が、安東先生の中学校の後輩だつ

たからです。そのお蔭で、それ以後の試合では、立技が崩れて、一緒に倒れると、先づ相手の腰に喰いつき、先生の教えを思い浮べつつ、ユックリ攻めました。関東では一般に寝技をやらないので、有利でした。丙組から始め、僅か三年半で三段になれたのも、全く先生の御教えの賜と深く感謝しています。

戦後アレビで、技の解説が出ますが、先生の様な、解剖、生理学的な考察を加えられたのは見当りません。その先生が昨年、心筋硬塞で急逝されました。直接教えて戴くチャンスは永遠に無くなりました。然し、「此の立派な研究」、誰かが書き残さねば、永遠に消え去るであろうと思い、敢て、未熟な私が筆をとりました。不完全極まる、或いは真を伝えていないと、地下の先生には怒られるかもしませんが……。

(勿論之は大筋だけです。後輩諸君(特に医学部)の目に留り、之を基に、更に研究発展あらん事を切望します。)

柔道考

羽島輝久

以前は興味をもって柔道試合を見ていた人で、今はつまらないからと遠ざかってしまった人が相当数あり、今の方が面白くなつたからこの頃は良く見ると云う例は全く聞かない。この一事を見ても柔道のルールは改悪されたと云わざるを得ない。他の要素もあるが学生数があふえているのに部員数が減つてしまつても魅力が少なくなつたためだと思う。

世界のルールには問題ありと殆んどの人が指摘しているが、改善の方途はもつていてない。

柔道界の進歩的な指導者と目される人でも現在の世界ルールにのめり込んで我々から見ればルールの技葉末節にとらわれ、所謂擬装場外（場内に決る筈のない技を場外近くでかけて試合を中断する）、擬装攻勢（決る筈のないしかも返され難い技らしいものを相手より数多くかける）は審判員の能力を上げれば防止できるといった議論をしている。或は日本の選手は引き手を離して技をかけたり、両膝をついて背負投げをかけたりするが、ソ連の選手は連絡変化技をもっており、場外に出ることも少いと評しているが、私は日本の場合は選手が悪いのではなくルールが悪いのでこうなったものと断ぜざるを得ない。むしろソ連では旧ルールで国内試合をやらせているのではないかと疑いたくなる。場内外にとらわれないで相当な時間をかけて一本とり合い、結果として引き分けもある柔道が本当の柔道だと考える私から見れば、的外れの議論だと思う。柔道新聞紙上のオリンピックについての猪熊君の感想もルールの問題点を挙げているが改善のための具体的提案はしていない。戦評においては結果論で上村、二宮、園田三君を賞め、立派な柔道をやったと書いているが、テレビで見た限りでは私はそうはない。

とそれそうな弱い相手に対しては一本をとりに行くが、手ごわい相手にはガラリと行き方をかえて、優勢勝ねらいの算盤柔道に走っていた。

終戦後一般に柔道大会がやっている、成可く多くの切符を売り、運営費をかけないで、一日で三十名以上の選手の中から一人を選び出すというような興行的とも見られる様な全日本選手権大会等試合全般の運営、無定見な外国人迎合に端を発したルールの変更は三十年頃から国際化、オリンピック参加等のかけ声で更に改悪が進み、これに便乗した算盤達者な人が再度選手権者になるといった現象を生じたのである。

日本が世界連盟の会長の椅子を矢つてからは急角度で柔道着を着たレスリングの様相を帯び、全く別な格斗技としての競技柔道に随して行った。

現在の指導者は絶対的に力のある選手を育てあげ、これで完全制覇をして発言権を得てからルールを改める発言をするのだと云うが、翻つて考へるならその選手こそいい面の皮で、誰もがつまらぬ、正しくないと考へているルールに不本意ながら合わせて作られるロボットであり、道具にすぎないわけで、本人がこれを承知でやるにしてもやらせるのは酷というものであろう。

現在の我国の柔道界のスタッフをもつてしては世界柔道の引き戻しは不可能であると判断せざるを得ない。そうであるなら大欲をすべて、国内に目を轉じ、正しいと思われる柔道を残すことに専念すべきだと思う。

昭和十年代に栄えた概ね是認得する柔道を身をもって体験した人々が現存しているのであるから、柔術諸派から柔道を創り出した時の苦労に較べればはるかに楽だと云える。

柔道の練習、研究がその虚無取りにも試合にも具現し得る、凡ゆる体格、体型の人が己を生かし得るものでなければ学生体育として存在し続けることが困難と思うのである。

同憂同感の士があれば語り合いこの論を拡げ、このような柔道の団体を作つて行かねばならぬと最近しきりに考える次第である。

しかし帝大柔道の轍は踏みたくないでの、我が柔道部をこの方向に引っぱり込むのは相当の自信がわいてからにしたい。

(一九七六年九月記)